



くちびるに歌を

先日の七夕の日、さくら組の子どもたちが介護老人福祉施設「アイユウの苑しおはま」を訪問しました。4年ぶりの利用者の皆様との交流です。コロナの間は、「ビデオレター」を通じて交流を続けていましたが、やっと訪問が再開しました。

この日に向けて園児たちは練習に励んできました。七夕のお話をパネルシアターで発表することに決め、ナレーションを覚えたり、大きな声ではっきりと表現したりする練習を繰り返しました。また、「たなばたさま」の歌も何度も練習しました。



当日、40人余りの皆さんに拍手で迎えられ、緊張はしたものの堂々とパネルシアターを上演。欠席したお友達の代役も難なくこなしていました。「たなばたさま」の歌では、利用者の皆様も一緒に歌っていただき、会場がとても優しい雰囲気になりました。織姫と彦星同様、年に1回の交流ですが、子どもたちにとっては世界を広げるとも貴重な経験となっています。

さて、園では4月からマスクを外して通常の合唱が解禁。堰を切ったように各部屋から元気な歌声が毎日聞こえてきます。伴奏のピアノも息を吹き返したように軽やかです。2年前の園だよりで、「マスクを外し、大きな口を開けて、大合唱しているセミに聴かせてやりたいくらいの合唱が再びできる日を待ち望むばかりです。」と書いたのを思い出します。ようやく今その時が来ました。

くちびるに歌を持って。
軽く、ほがらかに。
自分のつとめ、
自分のくらしに、
よしや苦勞が絶えなかりと、
いつも、くちびるに歌を持って。

これは、ドイツのある詩人による「心に太陽を持って」の一節。歌の持つ力は誰もが認めるところです。

同じく、中田永一著「くちびるに歌を」(小学館文庫)では、長崎県五島列島を舞台に、中学生の合唱コンクールを通して歌の不思議な力がこのように描写されています。

ステージ上に整列している合唱部員たちの、ちいさな身体から発せられている声なのだ、頭ではわかってはいるのだけど、どうしても信じられなくなる瞬間があった。複数の人間の声が、織物のように世界を紡ぎ上げていた。伴奏と人間の声だけで、音楽のうねりが作り出される。複数の合わさった声は、個人の気配を消して、音の巨大な生き物を生み出していた。神話で語られるような大きさと神々しい音楽の生き物だ。

合唱部員のような響き合う歌声ではないものの、アイユウの苑と一緒に「たなばたさま」を歌った時も、ホールに集っている皆さんとの一体感を確かに感じました。

実は、さくら組の子どもたちは、カエルとも一体感を感じる経験をしました。

雨の日に見つけたカエルを部屋に連れて帰り、カエルを囲んでみんなで「かえるの合唱」を歌っていた時のこと。♪かえるのうたが きこえてくるよ クワックワックワックワッ ゲロゲロゲロゲロ クワックワックワックワッすると、なんと途中からカエルまでも一緒にゲロゲロ歌い始めたではありませんか。これには子どもたちも大喜び。まさにカエルとの「合唱」の瞬間でした。

ちなみに、よく輪唱で歌われるこの歌のカエルの鳴き声は、地方によってまちまちだそうですが、正しくはこのようです。♪かえるのうたが きこえてくるよ クワックワックワックワッ ケケケケケケ クワックワックワックワッ

もし子どもたちが原曲に忠実に歌っていたら、部屋に招待したカエルと一緒に歌ってくれなかったかもしれませんね。なぜなら、彦島のカエルは「ゲロゲロゲロゲロ」と鳴いているからです。

子どもは、リズムやメロディーよりも歌詞への関心が高いと言われています。しかも、身近で、短くわかりやすい歌詞が受け入れられるようです。カエルの鳴き声ひとつとっても、身近なカエルの鳴き声で歌う方が「軽く、ほがらかに」歌えますね。(園長 寺本 明生)